

<研究課題> 重度身体障がい者の介護者を伴う旅行の
企画・実行プロセスと交通配慮事項に関する基礎的研究

研究代表者 神戸市立工業高等専門学校都市工学科 准教授 小塚 みすず
共同研究者 神戸市立工業高等専門学校都市工学科 准教授 田島 喜美恵
公益財団法人豊田都市交通研究所 主席研究員 三村 康広

【まとめ】

「外出および旅行の企画・実行プロセス」については、重度身体障がい者が参加する活動については、利用者の家族の希望、参加人数、トイレ等の施設や身体的負担など外出先の状況を想定し決定している傾向が見られた。とくに、排泄を考慮した計画が重要であることが明らかとなった。「交通配慮事項」としては、安全性の確保はもちろん、移動中の心情のコントロールに配慮した発話が展開された。また、外出時は障がい者への気遣いだけでなく、一般の人々など周囲に気を配りながら通行する場所、滞留する場所を選んで行動していることが明らかとなった。円滑な移動環境づくりには準備と当日の被験者の状態を見極めるという判断が欠かせない。経験を重ねることで、外出のノウハウを蓄積し、これが職員（介助者）の理解や、臨機応変な対応につながると考える。

1. 研究の目的

障がい者にとって外出時には様々な障壁が生じる。とりわけ、自分の意思で身体を動かすことが難しく、かつ、言葉を発することができない完全介護が必要な重度の身体障がい者（以下、「重身者」とする）にはより多くの配慮が必要となる。近年の障がい者福祉においては「地域で自立した生活を行う」ことが重要視されてきており、このためには、障が

い者施設等で提供される外出等の支援サービスを利用できる体制や環境づくりが重要である。また、外出時の困難さや不安感から外出の機会を削るのではなく、現状の地域社会における外出時の課題に対し、経験の蓄積により裏付けされた外出のノウハウを活かすことができれば、障がい者だけでなく介助者も一緒に無理なく外出できるアクセシブルな環境の構築につながるだろう。

本研究は、「外出や旅行の企画・実行の一連のプロセス」と実際の旅行中に必要な「交通配慮事項」に関する情報を整理することで、重身者および介護者が安全に外出できる空間づくりの知見を得ることを目指す。

2. 研究方法と経過

2-1 アンケート調査の概要

アンケート調査の対象は、大阪市羽曳野市、または、愛知県豊田市で障がい福祉サービス事業を行っている施設または事業所（以下、「施設」とする）である。調査対象の抽出は、大阪府羽曳野市については、「はびきの事業所ガイドブック（障害福祉編）2018年版」、もしくは、（独）福祉医療機構が運営する総合情報サイトWAM NETに掲載・登録されている施設から55施設を対象とした。他方、愛知県豊田市については、「豊田市障がい福祉サービス事業所ガイド（令和元年度版）」に掲載される生活介護施設の32施設を対象とした。

アンケート調査は、2020年7月中旬～8月中旬に、大阪府羽曳野市では郵送調査法、愛知県豊田市ではWEB調査（施設のメールアドレスに調査依頼状を送付するとともに、調査票のWEBフォームアドレスを送付）により実施した。主な調査項目は、①施設の基本情報、②利用者、利用者の外出を伴う余暇活動、③施設が参加した地域の行事・活動、④非常時の対応（避難や新型コロナ感染など）、⑤その他（施設の運営、建築・設備）である。

その結果、大阪府羽曳野市は7施設、愛知県豊田市は8施設からの有効回答を得た。アンケート回答施設の概要を表1に示す。

2-2 ヒアリング調査

アンケート調査の設定では、継続的な調査への協力意向について尋ねている。回答で、協力意向のあった施設を対象に、個別にヒアリング調査の協力を依頼し、4施設への調査を実施した。ヒアリング調査は新型コロナウイルス禍ということもあり、電話、もしくは、WEB会議によるヒアリングとなった。

2-3 同行調査（参与観察）

大阪市羽曳野市の施設Fより協力いただき、外出を伴う余暇活動として、2019年12月のクリスマスリースづくり、および、2020年1月の初詣に同行し、参与観察を行った。

表1 アンケート回答施設の概要

回答施設	大阪府羽曳野市							愛知県豊田市							
	施設A	施設B	施設C	施設D	施設E	施設F	施設G	施設H	施設I	施設J	施設K	施設L	施設M	施設N	施設O
施設分類 (入所型:入、通所型:通、訪問型:訪)	入	入	通	通	通	通	通	通	通	通	通	通	通	入	通
受入定員[人]	50	50	60	50	40	20	10	20	70	20	70	20	20	50	70
利用者数(障がい者)[人]	44	7	55	47	45	22	10	17	62	18	69	13	41	56	69
障害者支援区分[人]	非該当	0	0	6	5	0	0	0	16	9	5	0	1	0	0
	区分1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	区分2	0	0	0	3	0	0	1	2	0	1	6	0	0	0
	区分3	0	3	6	8	1	0	1	1	5	1	7	0	3	1
	区分4	2	1	7	10	13	1	4	3	8	2	11	6	17	0
	区分5	0	1	15	9	19	0	2	1	2	4	14	4	11	1
	区分6	0	2	21	12	12	21	2	7	27	1	23	3	9	39
障害種別[人] (重複あり)	視覚障害	0	0	0	0	0	3	0	0	4	0	1	0	2	0
	聴覚・平衡機能障害	0	0	0	2	0	2	0	0	1	0	1	0	1	2
	音声・言語・そしゃく機能障害	0	0	1	0	0	20	0	0	0	0	0	0	41	22
	肢体不自由	0	3	10	10	8	22	4	7	30	1	42	0	7	56
	内部障害	0	1	0	3	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0
	知的障害	44	2	52	45	45	21	3	17	18	18	19	100	41	26
	精神障害	0	1	0	4	1	0	3	0	0	0	7	0	1	1
	難病	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
重症心身障がい者	人数[人]	0	1	10	1	5	21	0	7	24	1	20	0	0	23
	割合[%]	—	14	18	2	11	96	—	41	39	6	29	—	—	41
利用者年齢[人]	20歳代以下	44	0	15	19	13	12	1	16	36	6	10	8	9	1
	30歳代	0	0	18	7	11	9	0	1	12	9	15	5	15	8
	40歳代	0	0	16	12	6	0	1	1	4	1	16	0	11	8
	50歳代	0	4	3	6	4	1	4	0	7	2	22	0	5	23
	60歳代以上	0	3	3	3	11	0	4	0	3	0	6	0	1	16
職員数[人] (うち、常勤職員数)	51 (32)	46 (11)	26 (20)	26 (8)	28 (19)	19 (8)	6 (2)	17 (7)	30 (16)	7 (5)	33 (7)	30 (6)	8 (5)	58 (32)	33 (22)
利用者数/職員数比	0.86	0.15	2.12	1.81	1.61	1.16	1.67	1.00	20.6	2.57	2.09	0.43	5.12	0.97	2.09

3. 研究の成果

3-1 外出を伴う余暇活動の実施状況

2019 年度に各施設が催した最も大きな外出を伴う活動・行事について尋ねた。15 施設中 14 施設が外出を伴う余暇活動を実施していた。外出先は県境をまたぐ外出が 6 件あり、うち 3 件は宿泊旅行である。重心者の参加は 5 件に留まり、回答内容からも重心者の外出を伴う余暇活動の参加の困難さがうかがえた。

3-2 余暇活動外出先の決定方法

余暇活動の外出先の決定方法は、施設職員提案や施設利用者の希望によるものが多い。重心者が参加した施設に着目すると、利用者の家族の希望、参加人数、トイレ等の施設や身体的負担など外出先での状況などにより決定している傾向がある。

3-3 外出を伴う余暇活動の実施にあたっての配慮事項

外出前の配慮や準備として、とくに多くの施設から回答があった項目は「トイレや食事場所などの施設状況の把握」、「配車や乗車人数の組合せの配慮」、「タイムスケジュールや行動計画をしっかりと作成」、「利用者の持ち物・服装の確認を念入りに行う」であった。また、重心者が参加した施設では、外出先での通行経路を確認している傾向が見られた。

外出先に到着するまでの移動中の配慮事項では、利用者の容態を注意深く確認している施設が最も多い。また、交通安全や利用者や職員の位置の把握、利用者の気分への配慮をしている施設も多い。重心者が参加した外出では上記の内容を全て行っていた。

外出先では「利用者の状況（楽しんでいるか否か）を気にかけて」、「利用者の状況（安全かどうか）を気にかけて」が多くの施設で選択されている。また、「外出の様子を写真やビデオなどで撮った」を選択した施設も多く、全施設共通として外出を実施しているときの

利用者の楽しさと安全性の確保を最優先に考える行動が行われていると考えられる。

最後に、外出による利用者の変化についてみると、多くの施設で「笑顔が多くなった」と回答した。各施設が家族に外出中の様子を写真やビデオを見せたり話で伝えていることもあり、外出を伴う余暇活動が家族から好意的に受け容れられていることが分かった。

3-4 障がい者の外出の問題

外出全般についての意見を整理したところ、時間、場所、空間的な面で外出先が制限されてしまうことが指摘されている一方で、積極的な外出を行うことで環境の整備に役立てようとする行動をとっている。バリアフリー化が進み、障がい者の社会活動が一般的になりつつあるものの、まだまだ障がいや障がい者に対する理解の促進は必要とされている。さらに、新型コロナウイルス蔓延により外出を伴う活動が実施できなくなることを心配する意見や利用者やその家族の不安やストレスに関する心配の声があげられた。

3-5 介助者および障がい者の発話分析

調査対象の施設 F は 2010 年に開所した民間の通所型の生活介護事業所である。遠足、季節行事、福祉農園活動など、屋外での余暇活動を積極的に実施し、外出のノウハウを蓄積している施設である。ここでは、2020 年 1 月 10 日（土）の初詣行事に同行した参与観察での参加者らの言動を整理するとともにヒアリング調査から外出を伴う余暇活動を円滑に実施するための配慮や工夫について述べる。

外出に関わる一連の移動や活動は、移動前（外出の準備）、往路移動、余暇活動（目的地での活動）、復路移動の時系列毎に整理した。被験者および介助者の発話は被験者の車いす取り付け IC レコーダーと調査員のメモ記録に基づく。図 1 は CASE-1 の被験者を事例に発話のタイミングとその内容を整理したも

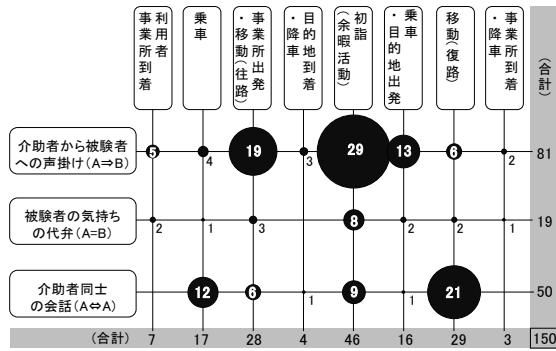


図1 発話内容(CASE-1)

のであり、行には、誰から誰への声掛けか、誰の気持ち・言葉を前後の文脈から整理し、列は時系列で活動を整理したものである。

CASE-1の発話数は全150である。一連の発話等から、声掛けや会話の主体と活動との関係、会話の内容は時系列で異なることが分かった。例えば、介助者と被験者のやり取りは移動時での車内や余暇活動時に発生する。一方で、介助者同士のやり取りは被験者を運ぶための準備や余暇活動の終了後に多くみられた。とくに余暇活動後の会話では、業務的な会話だけでなく、直接介助に関係のない日常会話が展開されていることなどから、復路の車内は介助者同士が打ち解けるような時間となっていることが明らかとなった。

3-6 参与観察(初詣)の様子

初詣への参加者は、介助者12名、被験者12名、調査員4名である。目的地(神社)までは福祉車両4台で移動した。初詣の様子を図2に、初詣中の配慮事項を下記にまとめる。



図2 初詣の様子

- ・全員がまとまって移動するのではなく、少人数で分散して移動する。
- ・参道を通らず、脇の砂利道上を移動する。
- ・お詣りの場所への移動が円滑にできるように、拝殿建屋に沿って到着した順から整列。
- ・意思疎通を図りながら介助者と一緒にくじ引きや鈴を鳴らすなどの参拝動作を行った。
- ・参拝後は速やかに広い空間に移動し、おみくじを開封した。介助者から利用者への説明、気持ちの代弁、喜びの共有、他の利用者との介助者を介しての会話を行った。
- ・移動の際は利用者への注意の声掛けや、気持ちの代弁が行われ、移動時のストレスを溜めないための配慮がなされた。
- ・現地では、通路空間を空けたり、交通整理を行うなど一般参拝者への配慮が行われた。

4. 今後の課題

同行調査の配車において、障がい者の障がいやその程度や人との相性が配慮されており、介助者の座席も経験などが考慮されていた。また、車内での様子や発話内容が異なったことから、車毎の差異や特徴にも着目したい。

5. 研究成果の公表方法

本研究成果は、国内の学術雑誌等への投稿や研究発表を予定している。なお、研究成果の一部は下記の通り発表している。

- 1)小塚・田島・三村: 重度心身障がい者の介護者を伴う外出時の円滑な移動環境づくりに関する基礎的研究—参与観察における外出時の介護者の発話情報に基づいて、日本福祉のまちづくり学会, 23, 1b-2, 020. 10. 17.
- 2)三村・小塚・田島: 重症心身障がい者の外出を伴う余暇活動に関する基礎的研究—愛知県豊田市の生活介護サービス事業所を対象に一、日本福祉のまちづくり学会, 24, 1c-1, 2021. 10. 17.
- 3)久谷・小塚・田島・三村: 障がい者・重症心身障がい者の外出を伴う余暇活動に関する基礎的研究—大阪府羽曳野市の障がい者支援施設および障がい福祉サービス等事業所を事例として一、都市計画報告集, 20, pp. 211-216, 2021. 08.